



Title	テーマ・レーマとインドネシア語における受動の問題
Author(s)	松野, 明久
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 3, p. 35-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79494
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

テーマ・レーマとインドネシア語における受動の問題

松野 明久

Theme/Rheme and the Problem of Passive in Bahasa Indonesia

Akihisa MATSUNO

This paper argues that the so-called passive construction in Bahasa Indonesia can be divided into four patterns in terms of structural unit and Theme/Rheme, and demonstrates how they are discourse-functionally different. The paper also claims that the criteria of message structure is more important than constituent order in explaining discourse function of each construction type.

(1)インドネシア語における受動の問題

「受動」といえば、インドネシア語、ないしはマレー語の文法研究がはじまって以来、今日にいたるまで最も多く論じられてきたトピックである。⁽¹⁾しかし、今もって明確な説明がないまま、さまざまな試みがなされつづけている。何が問題なのかというと、われわれの言葉でいう「～される」に相当する動詞の形式を「受動」と命名したわけだが、実際にはその「受動」と命名された形式が、われわれの言語においては「～する」、すなわちいわゆる能動で訳した方がいい場合が多々あるということである。その意味するところはインドネシア語の「受動」が、われわれの言語において能動が果たしている談話機能をもっているということに他ならない。もちろん問題なのは談話機能だけではない。語順やアーギュメントの特性、実際の感覚が「受動」的かどうかという心理の問題もある。こうしたさまざまな論点がからみあって、結局、このわれわれが簡単にも「受動」と呼んですましてきた形式は本当に受動なのだろうか、そもそも受動とは何か、という疑問が生じるのである。

本稿では、まずインドネシア語におけるいわゆる受動の問題とそれへの談話機能的なアプローチを概観したのち、テーマ・レーマという機能文法の概念を使って受動の構造的なパターンを明らかにする。そしてそれらのパターンがもつ機能を具体的なテキストにおいて検証する。

問題になっているのは次のような対立である。下線部が動詞である。

	能動	受動
1 人称	Aku <u>membaca</u> buku itu.	Buku itu <u>kubaca</u> .
2 人称	Engkau <u>membaca</u> itu.	Buku itu <u>kaubaca</u> .
3 人称	Dia <u>membaca</u> buku itu.	Buku itu <u>dibacanya</u> .
人称なし	—	Buku itu <u>dibaca</u> .

上の文において、能動では代名詞の主語ではじまり、能動形の動詞（語根-baca「読む」に接頭辞ME-がついている）がそれに続き、「その本」という対象が目的語としておさまっている。人称なし（あるいは主語なし）の能動文も存在する。しかしここでは問題とは関係ないので省略した。(2)受動においては対象である名詞が主語になり、行為者と動詞がそのあとにきている。動詞は代名詞の短縮された接続形をつけている。代名詞の接続形と動詞は一体のものとして表記することになっている。3人称の接続形はdi-nyaで、この場合語根はそれによって囲まれる。受動でとくに行為者を言わない場合、人称なしの受動の標識(di-)を使う。

ここまでは、対立を能動と受動ですますことができる。反論があるとすれば、1人称、2人称の受動はむしろTopicalizationではないかということであろう。(3)いずれにせよ、問題は次のような事情によって生じている。インドネシア語においては一般に主語部分と述語部分は、談話上の焦点のおき方によって交替させることができる。したがって、次のような受動文が可能である。

1 人称	Kubaca buku itu.
2 人称	Kaubaca buku itu.
3 人称	Dibacanya buku itu.
人称なし	Dibaca buku itu.

しかしこうなると能動とどう意味が違うのかわからなくなる。能動とこの転倒した受動の場合、いずれも対象が動詞句のうしろに置かれているからである。しかもこの転倒した受動文の頻度は決して低くない。次の文章は英語の対訳がついているマレー語文献の一節であるが、英語訳と見比べてみると、受動の訳として英語ではもっぱら能動が用いられているのがよくわかる。

Kemudian daripada itu maka(1) dilihatnya oleh Muhammad Tahir ada seorang fakir, terlalu baik rupanya dan tanda salihpun ada pada mukanya, sebagai ia tawaf pada Ka'bah Allah. Maka segerah(2) didapatkannya lalu memberi salam. Maka(3) disahuti oleh fakir salam Muhammad Tahir itu. Maka(4) diperamat-amatinya oleh Muhammad Tahir seperti

pesan ibunya akan segala sifat Sultan Ibrahim itu.

Then Muhammad Tahir(1) saw that there was a religious mendicant there, of very comely appearance, and with an expression denoting piety, constantly performing the circumambulation around the Ka' ba. Muhammad Tahir(2) approached him at once, and greeted him. The mendicant(3) returned Muhammad Tahir's greeting. Muhammad Tahir(4) scrutinised him very carefully to see if he fitted the description of Sultan Ibrahim given to him by his mother;

—Russel Jones, *Hikayat Sultan Ibrahim*, pp.32-33

転倒した受動が用いられる条件については、次のことが指摘されている。

まず、転倒した受動が表わす動作は、具体的で目に見えるたぐいの個人によるものが多い。(Cartier, 1979, p.181) しかもそうした動作が連続的に行われるという場面においてよく用いられる。(Hopper, 1983) 上に示したマレー語文献からの文章はその好例であろう。こうした特徴によって転倒した受動はその他のジャンルより文学作品でよく用いられる。(4)

また、転倒した受動は物語にとって重要な出来事としてその動作を前面化 (foregrounding) する機能をもっている。一方、対象が前置される受動はあまり重要でない出来事を後方化 (backgrounding) する機能をもっている。能動も後方化機能をもっている。(Hopper, 1983, pp.71-72, 80)

転倒した受動の場合、対象が前置される受動、および能動に比べても「他動性」が高い。この場合「他動性」とは、行為者・対象が存在するか、完了か未完了か、運動性があるか、対象が影響を受ける度合はどれくらいか、肯定文か否定文か、述部が現実的か仮定的か、行為者が生物かどうか、対象が定か不定か、動作が意識的かどうか、動作が一時点的 (punctual) か継続的か、という10個の変数によって算定されるものである。転倒した受動が全体として他動性が高いということの他に、それぞれの変数を細かく見ていくと、能動に対し、転倒した受動がもつ特徴が明らかになる。最も顕著な特徴は、対象の定性 (definiteness) が高い、動作に運動性がある、法の助動詞との共起性が高い、動作が一時点的である、などである。(Hopper, 1983, pp.73-88)

転倒した受動は、最近では「能格」として議論される。「受動」と呼ぶにはあまりにもその機能が能動的だからである。実際、自動詞文の主語と他動詞文の目的語との間にはいくつかの点においてパラレルな特徴が見られる。(5)

本稿は能格としての受動の研究を排除するのでもはまったくないが、どう命名するかはともかく、そのコミュニケーション上の機能を明らかにすることが目的なので、ここではひとまず能格という用語は使わず、転倒した受動と呼んでおくことにする。あとで明らかになるように、この転倒した受動は、それ自身異なる2つのパターンをもっている。われわれにとっては、この2つのパターンこそより重要な区別であることを示そうと思う。

(2)テーマ・レーマ

テーマ・レーマは機能文法の基本的な概念であるが、2つのまったく異なった定義がなされている。ひとつは Halliday のもので、彼はテーマを「メッセージの出発点となる要素」と定義し、文頭という位置がテーマの定義となるわけではないが、英語の文法においては、文頭という位置が、テーマの機能を実現する手段になっている、とのべている。(Halliday, 1985, pp. 33-61) 彼の分析の一例を以下に示す。

What the duke gave to my aunt was that teapot.
Theme Rheme

This teapot was what the duke gave to my aunt.
Theme Rheme

It was his teacher who persuaded him to continue.
Theme Rheme

A loaf of bread is what we chiefly need.
Theme Rheme

(Halliday, 1985, pp. 42, 60)

Halliday 流にテーマをとらえると、「英語においては」という彼自身限定しているにせよ、どうしても文頭の要素がテーマになるとしか考えられない。彼は文頭に来る要素なら、品詞や句か節かに関係なくテーマとみなし、そうした要因によるテーマのバリエーションを詳細に記述している。そうなると結局のところ、文はいろいろな性格の要素をもって出発している、といった現象の記述に他ならないように思われる。⁽⁶⁾ 実際、レーマではなく、テーマについてのみ詳しい分析を行っていることからわかるように、彼にとって問題はテーマであってレーマではない。テーマとレーマの関係について彼自身はあいまいなままである。例えば、あるところでは「メッセージ構造として、節はテーマにレーマが伴っているという構成になっている。(as a message structure, therefore, a clause consists of a Theme accompanied by a Rheme) と述べたり (p. 38)、 「メッセージはテーマがレーマと組あわさってできている」 (A message consists of a Theme combined with a Rheme.) と述べたりしている。(p. 39) とにかくテーマを定位することが重要だと考えられているようで、レーマの存在はそれに依存している、またはそれに対して二次的であると言っているようである。もちろん、複合テーマという概念の導入によって、例えば、I don't believe that pudding ever will be cooked. という文において、ever will be cooked をレーマとし、のこりの部分をテーマとしているのはレーマ中心の考え方である。(これは Tag question にした場合、Tag が will it? となり、do I? とならないことからそう判断される。) とはいえ、やはりテーマへのこだわりが全体を貫いているので、Halliday 流のテーマは、文法

的主語、意味上の主語、心理的主語に対して、メッセージの主語と言えるものかと思う。

しかし一方、機能文法家の着想の源泉となっているプラグ学派のテーマ・レーマはこれとはずいぶん異なった精神で考案されたもののようである。Firbasは、テーマを「最低のコミュニケーション・ダイナミズムをもつもの」、レーマを「最大のコミュニケーション・ダイナミズムをもつもの」と定義している。コミュニケーション・ダイナミズムとは、いわば、要素のもつ、コミュニケーションの達成に貢献する力であって、コミュニケーションを前面に押し進めるその程度によって、コミュニケーション・ダイナミズムの程度がはかられることになる。(Firbas, 1964, p.270) 簡単に言ってしまうと、レーマとはメッセージの中のもっとも伝えたい部分、重要な部分であって、テーマはその逆、けずられるとすれば最初にけずられる部分ということになる。FirbasはIlyishの分析をひきながら、次のようにテーマ・レーマを示している。

The door opened, and the young girl came in.
Theme

The door opened, and a young girl came in.
Rheme

(Firbas, 1966, p.241)

Firbasにとって、レーマとはメッセージの意味上の述部のようなものである。(Firbas, 1966, p.241) 主語によって始まる文であっても、上の例のように、典型的には場面への登場、現場面での存在をあらわす動詞によって導かれる新情報が主語のスロットにおさまっている場合、やはり情報の重要さという観点からレーマだということになるのである。以下の例文も同類のものである。

A haze hovered over the prospect.

A fly settled on his hair.

An expression like that of a cat who is just going to purr stole over his old face.

A dumb and grumbling anger swelled his bosom.

(Firbas, 1966, pp.243-244)

次のような場合でも主語はレーマだとされる。下線部がレーマ。

In the passage was standing the girl with the veil, [pressing the parcel to her breast and panting for breath…]

Sometimes a terrible cry was to be heard, New Zealand apples were being sold, or rice-brooms from Australia were exhibited, or a billiard table manufactured in the Bermudas.

(Firbas, 1966, p.244)

こうして2つのタイプのテーマ・レーマ論を比べて見ると、構造機能主義的な考え方が徹底しているのは Firbas の方である。Firbas のテーマ・レーマは非常に抽象的で、直感や文脈の詳細な検討の上に割り振りをおこなうことになるので明確でなくなるきらいがあるが、逆に、伝達の道具としての言語の普遍的な性質から規定されているので、特定の言語の特定の構造、形式にとらわれないという利点がある。Halliday のテーマ・レーマは、レーマの方が重要であるにもかかわらず、テーマの規定、分類に多くの労力をかたむけていて、テーマが決まらなければレーマが決まらないという、テーマ・レーマの間に主述関係の類推が働いている。(7)

さて、本稿ではテーマ・レーマを、基本的には Firbas の考え方を踏襲しつつ、モデルとしてのメッセージを構成する相互補完的な2項と定義する。「相互補完的」という一見単純な条件はきわめて重要である。その意味するところは、テーマはレーマとの関係においてのみテーマであり、レーマはテーマとの関係においてのみレーマである、ということである。またここで言うメッセージは表層文のことではない。それは表層文に対してより抽象的なレベルに設定された、文の「内容」とでもいうべきものである。

テーマは、レーマがそれとの関連においてのみ解釈されることになる文脈を提供するメッセージの部分である。それはレーマがその中においてのみ意味をもちうるような領域を特定したり、レーマをメッセージにとって決定的に重要な情報として提示するための導入となったりする。提示される順序に関していえば、テーマ・レーマの順が自然で基本的と言えるだろう。したがってテーマがあとにくる場合、それはレーマが有意味に関連づけられる領域を明確にするために付加的にせられるものになるだろう。

一方、レーマはメッセージの結論的部分であり、それなくしてはメッセージは完結しない。それはテーマという文脈の制約を受けるべく運命づけられており、レーマに内包された言明は、テーマの特定した領域においてのみ有効である。レーマは、それに対して注意を払うよう提示されたものである場合もあるし、その提示自身がコミュニケーションの目的だったりもする。

テーマもレーマも特定の語類、あるいは特定の統語上の単位との関連をもたない。またテーマもレーマも新情報／旧情報のいずれでもありうる。メッセージの伝達という観点からは、当然ながらレーマの方がテーマよりも重要である。したがって、伝達の経済性のために、文脈と文法が許せば、テーマを省略する（表層の文に現われない）ことは可能である。しかし話者はまがりなりにもメッセージを完結させたいと思うのであれば、レーマを省略することはできない。興味深いことは、修辭的な観点からは、テーマこそ創造的な領域であるということである。それはまさにテーマがメッセージにとってより重要でないという性質からくるもので、表現の置き換えが許されるのである。レーマはこの点融通がきかない傾向がある。しかし、レーマの提示は言語にとって重大な関心事であるはずだから、それぞれの言語は何らかの形でレーマ化（Rhematization）の装置を発達させることになる。つまり、メッセージの結論部分を劇的に提示するための装置である。英語の分裂文などはそのいい例であろう。そうした装置においては、レーマとなる要素が

ただ「一方ぼくに関しては」という対照がそこに示されている。) 下の文についてはありえないとは言い切れないが、ほとんど実際には発話されないだろう。少なくとも書き言葉においては例が見出せない。行為者がレーマである場合、インドネシア語では関係詞 yang を使って、分裂文のようなパターンにする。厳密に言えば、それは名詞文であって、先行詞のない関係代名詞 yang に導かれた「～する人、物」という名詞句がテーマになっているのに他ならない。

Saya yang membaca buku itu. わたしとその本を読むのだ。
レーマ

Yang membaca buku itu saya. その本を読むのはわたしだ。
レーマ

さて、一方受動文において構造的切れ目によって分離されるのは対象である。動作と行為者は、1個の構成素として分離することのできないユニットを構成する。(表記上分離して書かれることもあるが、その場合でも動詞と行為者の間には他の要素は入りこめない。) 対象がテーマのとき、受動文は次のようなメッセージ構造をもつ。

Buku itu // dibacanya. その本を彼は読む。その本は彼によって読まれる。
テーマ レーマ

Dibacanya // buku itu. その本を彼は読む。彼は読むのだ、その本を。
レーマ テーマ

対象をレーマに選択した場合、文は次のようなメッセージ構造をもつ。

Buku itu // dibacanya.
レーマ テーマ その本を彼は読むのだ。

Dibacanya // buku itu.
テーマ レーマ 彼が読むのはその本だ。彼はその本を読むのだ。

ちなみに、対象がレーマの場合、さきほどと同様、先行詞のない関係代名詞 yang を用いて、対象を効果的にレーマ化することができる。もちろんこの場合、すでに文は名詞文である。

Buku itu yang dibacanya. その本こそ彼が読むものである。

Yang dibacanya buku itu. 彼が読むのはその本である。

以上、われわれは受動文につき、テーマ・レーマとの関係で4つのパターンを得た。それをあらためてパターンとして記述すると次のようになる。なお、受動文では対象が構造的に分離され、それにテーマないしはレーマがアサインされるので、分類も対象のないう値を基準に行った。□ はアクセントのあるユニットを示す。アクセントは前置されるレーマにつく。人称なしの受動についても基本的にはこの4つのパターンにおさまる。

(A)対象がテーマ

1. 対象前置型 対象 // 行為者+動詞

2. 対象後置型 行為者+動詞 // 対象

(B)対象がレーマ

3. 対象後置型 行為者+動詞 // 対象

4. 対象前置型 対象 // 行為者+動詞

従来、受動文の議論においては、このすべての4つのパターンをまとめて一緒のものとして扱うか、あるいは、要素の順を基準に、1と4、2と3をひとまとめにするかしていた。受動文を二分する後者の場合、1と4は、真正の受動として問題ないものとされ、問題は、対象が後置されている点で能動との区別が問題になる2と3であるとされてきた。しかし、本稿が重要視するメッセージ構造の観点からすれば、2は1の単純な倒置であり、4は3の倒置に他ならない。倒置が行われるのは文法的理由によるというよりも、対象のテーマ性の度合や重要性、あるいは文体論的理由によるのではないと思われる。しかし、(A)と(B)の区別は文法的、より厳密には談話文法的理由によるもので、あるテキストにおいて4つのパターンのどれが選ばれるのかには必然性がある。したがって、パターンを変えて当てはめると、ちがった解釈を生んでしまう。

とはいえ、このパターンが実際、非常に微妙でわかりにくいものであることは確かである。その原因はアクセントという要因の存在である。アクセントは表記できないので確かにわかりにくい。しかし、インドネシア語の文法の記述にとってアクセントを考慮しなければならないことはよく指摘されることである。ただそのいい方法が発見できないだけである。本稿では、レーマが前置されるときにその自然なメッセージ構造(テーマの次にレーマがくる)が逆転しているから、その標識としてレーマにアクセントがくると主張している。こうした現象はインドネシア語に限らず、普遍的に見い出せると思われるが、とりわけレーマ化する文法装置が用いられていないとき、いきおい、アクセントに依存する傾向が見られるようである。

(4)パターンの検証

(3)で導き出した4つの受動文のパターンのそれぞれがもつ機能について、以下、実例によって検証する。

まず最初のパターンであるが、対象がテーマで、動作と行為者の部分がレーマとなる。もっとも一般的に受動と解釈することに無理のないパターンである。むしろこのパターンの存在によって、この動詞の形式が受動と命名されたようなものである。多くの理想化された受動の解説がそうであるように、わかりやすい例として、対象が既出の名詞(すなわち旧情報)の場合をまず紹

介しよう。単純な下線はテーマ、波線はレーマを表わす。

Pernah juga ia bercerita tentang pengalamannya waktu masih kecil — lebih tua beberapa tahun daripada aku pada waktu itu. Cerita itu selalu kuminta diulangi lagi dan diulangi lagi. (*Yang Sudah Hilang*, p.4)

かつて彼女は幼いころの体験について話を聞かせてくれたことがあった。そのころの私より何才か年上だったころの話だ。その話を私は何度も何度もくりかえしねだったものだった。

Seperti ikan melihat umpan, orang berduyun-duyun pergi ke Pasar Malam Rakutenci. Umpan dimakan, langit-langit tersangkut, diangkat orang ke atas … mati. (*Pasar Malam Jaman Jepang*, p.89)

あたかも魚が餌をみつけたように、人は夜市「楽天地」におしよせた。餌をくわえたとたん、口蓋がひっかけられ、人につり上げられ、そして死んでしまう。

テーマとして明白なものは省略される。

Tapi besi-besi ini jatuh ke tangan orang Nippon preman dan dicatutkannya dengan harga mahal kepada pemerintah. (*Jawa Baru*, p.88)

しかしそれらの鉄は民間の日本人の手にわたり、彼等が高い値をつけて政府に売り渡した。

Tukang es lilin mengambilkan sebatang es lilin dan diberikannya kepada orang laki-laki itu. (*Sanyo*, p.95)

氷屋はアイスクャンデーを一本取りだし、その男に渡した。

Saya pukul enam tepat berjanji dengan tukang ayam. Ditukar dengan baju rombeng-rombeng. (*Fujinkai*, p.98)

わたしは6時きっかりに鶏屋と約束してるんですよ。ボロ着と交換するんです。

1人称、2人称は常に場面の中にあるので、テーマになりやすい。

Hari sudah sore. Nanti kalau bapak datang, engkau kupanggil. (*Yang Sudah Hilang*, p.14)

もう夕方よ。あとでお父さんが帰ってきたら、呼んであげるからね。

Aku tak peduli. Tapi engkau tak kurelakan menjadi Heiho itu. (*Heiho*, p.112)

わたしは(時代のことなんか)気にしない。けど、あんたを兵補なんかにさせやしないわよ。

登場人物の身体部分もテーマになりやすい。

Perempuan itu melihat saja kepada kondektur. Di belakang kondektur bibirnya ditariknya ke kanan seperti monyet, dan katanya, "Lihat monyet itu." (*Kota-Harmoni*, p.81)

その女は車掌を見ているだけだった。車掌のうしろで、彼女はくちびるをゆがめ、さるのような顔をして言った。「あのさるをごらんよ。」

Di muka barisan berdiri seorang orang Indonesia, pakaiannya compang-camping. Tangannya yang kudisan itu dimasukkannya ke dalam lubang loket dan berkali-kali katanya, "Jakarta satu kelas empat." (*Oh...Oh...Oh!*, p.103)

列の頭にはぼろぼろの服を着たひとりのインドネシア人が立っていた。そのかいせんにかかった手を窓口にさしこみながら、彼はくりかえし「ジャカルタ、一等4枚」と言っていた。

テーマが斜格の場合もある。

Nyonya-nyonya sekalian. Kalau dapat saya memendekkan pembicaraan saya, maka saya akan berkata: acara rapat ini ialah, meminta kemurahan hati Nyonya-nyonya, memberi ala kadarnya sejumlah uang, untuk membuat kuwe-kuwe itu... Tentang kapan kita akan mulai bekerja, nanti akan saya beritahukan lebih lanjut.

(*Fujikai*, p.100)

みなさま。てっとり早く申しますと、この会合の主旨は、みなさまにそのお菓子をつくるためにできる範囲で費用を捻出していただきたいということでございます。いつ作業を始めるかにつきましては、のちほど私の方からお知らせいたします。

次に2つ目のパターンの例を示す。このパターンにおいてはテーマたる対象は動詞の後に置かれる。最初のパターンと比べると、テーマたる動作がいきなり頭に出されるので、その分ダイナミックな印象を受ける。したがって相対的にテーマの重要性が低くなるようである。今回ひろった例を見る限り、このパターンの場合、テーマは意識のごく中心に近い、言葉をかえて言えば、復元性の高い名詞である傾向が見られる。典型的には1人称であり、場面の中の主要な人物、話

題となっている登場人物の身体部分、あるいはその持ち物である。テーマの復元性の高さは先行する動詞との共起性の高さからくる場合もあると考えられる。

Dari sekarang aku mesti mengetahui arti sanyo. Dipertakutnya saja aku dengan perkataan itu. (*Sanyo*, p.96)

今から「サンヨ」の意味を知らなければな。おれ、その言葉におどおどさせられてるだけだからな。

Aku tak mengindahkan suara bunda. Tiba-tiba kepastian bunda hilang. Diciuminya aku dengan sayangnya. Diturunkannya aku dari ranjang. Diletakkannya aku di lantai. (*Yang Sudah Hilang*, p.14)

わたしは母のいうことを聞かなかった。母のもつ確かさが突然消えうせてしまったのだ。母はわたしにいとおしそうにキスをした。母はわたしを寝台から降ろした。そしてわたしを床の上においた。

Suara itu sungguh lunak untuk perasaanku waktu itu. Kurangkul bunda, dan kukirimkan sedan-sedanku ke dalam dadanya. (*Yang Sudah Hilang*, p.5)

その声はそのときのわたしの感情にとって本当にやわらかな声だった。わたしは母にだきついて、その胸の中にわたしのすすり泣く声を送り込んだ。

Selamanya aku tak berani mendekatinya bila ia dalam keadaan seperti itu. Kutunggu ia dari luar kamar hingga ia habis bersembahyang. (*Yang Sudah Hilang*, p.9)

彼女（母）がそういう状態にいるとき、わたしは近づくことができなかった。わたしは、彼女がお祈りをおえるまで、部屋の外で彼女を待っていた。

Keheranan-heranan tukang jual karcis itu melihat kepada orang Indonesia itu dan mengejek diputarnya badannya dan ditiupnya peluit-peluitnya. (*Kota-Harmoni*, p.82)

切符売りはあきれた様子でそのインドネシア人を見、侮蔑するかのように体をくると回して、笛をふいた。

Tapi ia malu kepada orang banyak. Diberanikannya saja hatinya, dan katanya, "Itu tidak bagus. Naik dari jendela." (*Kota-Harmoni*, p.83)

しかし彼は人が大勢いる中で恥ずかしかった。彼は勇気をふりしぼって（直訳：みずからの心を勇気づけて）言った。「よくないことだ。窓から乗るなんて。」

Tapi ia harus menimbulkan kasihan Nyonya Sastra. Kalau-kalau Nyonya Sastra dapat menolongnya. Dikeraskannya hatinya dan di antara batuk-batuknya, …(Fujinkai, p.99)
 しかし彼女はサストラ夫人の同情を買わなければならなかった。サストラ夫人が助けてくれるかもしれないからだ。彼女は意を決して(直訳：心をかたくして)、せきばらいをしなが
 ら……。

3番目のパターンは動作がテーマとなって、それに続く名詞句を重要な情報として提示するパターンである。動作は、既出の文脈にすでに存在しているもの、あるいはそれから当然推測できるもの、あるいは次なる出来事として期待されているもの、またはレーマたる名詞を場面に登場させるために導入的な意味合いしかもたないもの、などがある。レーマたる対象が新情報、不定などの属性をもつ場合は典型的と言える。

Banyak? Kan kuberikan tadi hanya empat buah kepadamu?(Sanyo, p.94)
 たくさんだって。だって、さっきわたしはたったの4粒しかあげなかったでしょ。

Surya dapat surat pas untuk pergi ke mana-mana. Pulang dari Bantam dibawanya kopi. Pulang dari Cirebon beras dan rokok Kooa. (Fujinkai, p.100)
 スルヤ(夫)は通行証があるからどこへでもいけるの。バンタムから帰ってくるときはコーヒーをもって帰り、チレボンから帰るときは米と興亜のたばこよ。

Nyonya Sastra terkejut, dari tas kulitnya diambilnya sehelai kertas dan katanya dengan suara ngeong kucing kedinginan. (Fujinkai, p.100)
 サストラ夫人は驚き、皮製のバッグから1枚の紙切れをだし、寒さにふるえる猫のような声で言った。

Tunggulah sebentar…akan kuberikan untukmu sebuah surat penghargaan atas jasamu di kantor ini. (Heiho, p.109)
 少しだけ待ちなさい。(そうすれば)おまえのこの職場での貢献に対し、表彰状を上げるから。

Politik Nippon halus betul. Dicarinya orang-orang udik untuk menjadi Heiho. (Heiho, p.110)

日本の政策ってのはほんとによくできてるねえ。兵補にするのに田舎者をつかまえるんだから。

Kartono tida di rumahnya. Dilihatnya muka Miarti masam saja. (*Heiho, p.111*)

カルトノは家についた。見ると、ミアルティがおこった顔をしていた。

(直訳：彼はミアルティがおこった顔をしているのを見た。)

Dan air yang mengalir damai jadi gila berpusing-pusing. Diseretinya rumpun-rumpun bambu di tepi-tepi kali seperti anak kecil mencabuti rumput. Digugurinya tebing-tebing dan diseretnya beberapa bidang ladang penduduk. (*Yang Sudah Hilang, p.1*)

静かに流れていた水は狂ったようになった。あたかも小さな子供が草をむしり取るように、水は河岸の竹の茂みをひきちぎっていくのだった。河岸をけずりとり、住民の土地をいくつかひきちぎっていくのだった。

Dan pada penghabisannya dikatakan pula, bahwa pemerintah Nippon terharu sekali ketulusan seluruh rakyat Pulau Jawa. (*Jawa Baru, p.88*)

そして終わりには、日本政府はジャワ島のすべての住民の誠実さに心うたれたと云うのである。

最後の例文は、よく疑問を呈されるパターンである。ここに上げたものは行為者が出ていないが、行為者を含む *bahwa*-節(補文)を導く受動は、手紙、論文、随筆などジャンルを問わず活発に用いられている。一体能動の場合とどう違うのか、というのが呈される疑問である。違いは補文のみをレーマとしているかどうかである。補文のみがレーマの場合(つまり3番目のパターンの場合)、動詞部分はそれの導入程度の意味しかなく、かなり形式的なものか、他の表現に置き換えることのできるようなものである。もし能動が使われていれば、それは行為者に関するコメントと解釈すべきで、したがってそういう行為をしている「わたし」(あるいは誰か)を理解してほしいという意味なのである。

最後のパターンの例は実際には少ない。このパターンは、(2)で紹介した *Firbas* の不定の主語がレーマになっている形と同じであると考えていい。レーマたる名詞句がメッセージの頭にきて、話者の意識に突然投げ込まれるわけであるから、その名詞のあらゆる事物の存在様式を示すテーマたる動詞部分が、あまりややこしいものであってはならない。通常は存在、登場を表わす動詞がくるようである。あるいは文脈から、名詞さえ指示されれば、それがどのような動作に関連して指示されているのか推測しやすいような動作である。

Di ruang barisan propaganda orang sangat ramainya. Hasil perindustrian Jawa diperlihatkan, ban kapal terbang. (*Pasar Malam Jaman Jepang, p.90*)

宣伝用の陳列室は人が多かった。ジャワの工業製品が陳列されていたのだ。飛行機の車輪用のタイヤだった。

Sudah setengah jam aku menunggu. Belum juga diladeni. Orang itu juga diberi dulu. (*Oh...Oh...Oh...!*, p.103)

もう30分以上もまってるんです。でもまだ受け付けてもらえない。あの人は先にやってもらってるっていうのに。

Terlalu banyak kau alami belakangan ini. (*Anak Semua Bangsa*, p.7)

最近君はあまりにも多くのことを経験している。

Ia katakan, seorang muslim harus "merasa cukup" dengan setiap rezeki yang ia terima. Bila tidak, orang itu serupa monyet. Diberi pisang akan ditangkap dengan tangan kanan, diberi lagi ditangkapnya dengan tangan kiri, lalu dengan mulut, lalu kaki kanan, dan kaki kiri. Sudah begitu, "milik temannya pun hendak direbutnya." (*Tempo*, 28-4-90, p.76)

彼は言っている。イスラム教徒たる者、受け取る恩恵に「満足する」ということを知らねばならない。もしそうでなければ、その者はさると同じだ。バナナを与えられれば右手で受け取る。次にまた与えられたときは左手で受け取るようになり、その次は口で受け取り、さらには右足で、そして左足で受け取るようになるだろう。そして最後には、「友人の持ち物まで奪いたくになってしまうのである。」

Paling sedikit dua pak rokok dihabiskannya sehari. (*Tempo*, 28-4-90, p.77)

少なくとも一日2箱のたばこを彼は飲む。

以上、受動のそれぞれのパターンについて例文をみてきた。受動の4つのパターンは対象を構造的に分離し、それにテーマ、レーマをアサインしたものであった。これら受動のすべてのパターンに対して、能動のもつ機能は、行為者を分離し、それをテーマ、ないしはレーマ（稀だが）にすることである。そのことがテキストの展開において実際にどのように使われているかを以下見てみる。

次のテキストにおける能動・受動のパターンの交替を見てみよう。下線部は能動または受動の動詞である。

"Ibu! Ibu!" aku berseru. Ibu tak menyahuti, juga tak bergerak dari tempatnya. Dengan susah payah aku naik ke atas ranjang. Dan kulihat mata bunda merah, sebentar-sebenter dihapusnya dengan selimut adikku kecil. Aku terdiam. Lama. Terdiam oleh ketakutan. "Mengapa menangis, bu?" aku bertanya. Baru bunda

memandang aku. Diraihnya aku dan ditidurkan di sampingnya. (*Yang Sudah Hilang, p.11*)

「母さん、母さん」わたしは叫んだ。母は答えなかった。(能動) その場所から動くことすらなかった。わたしは苦勞して寝台の上に上った。そこで、わたしが見たのは(受動パターン3)、母の赤くはれた目だった。母はわたしの弟の毛布で拭いては(受動パターン1)泣き、拭いては泣きしていた。わたしは黙ってしまった。長い時間が流れた。こわさのあまり言葉がでなかったのだ。「母さん、どうして泣いているの」わたしはたずねた。すると母ははじめてわたしの方を見た。(能動) 母はわたしを引き寄せ(受動パターン2)、自分の脇に寝かせた。(受動パターン1)

「母は答えなかった」の文が能動なのは、その前の文で「わたし」が行為者となっているので、新たに「母」を行為者として立てる必要があったからである。「わたしが見たのは」(直訳は、わたしは見た)が受動になっているのは、その前の文の行為者がすでに「わたし」であり、寝台に上ったあと何が見えたかということがメッセージであるから、見えたものがレーマになっている(すなわち母の赤くはれた目)。「拭いては」の箇所だが、テーマは「目」で、前の節でレーマとして登場し、ここでは隠されたテーマになっている。「見た」の文が能動なのは、前の文の行為者が「わたし」で、それを「母」に轉換する必要があったからである。最後の2つはいずれも受動になっているが、理由は前の文で行為者の母がすでにテーマになっているからである。

こうして見ると、行為者が変わるときは、一旦能動になることがわかる。その後、同一の行為者が行う動作は受動で表わされることになる。しかし、次のような能動への轉換はどのように説明されるだろうか。

Dan air yang mengalir damai jadi berpusing-pusing. Diseretinya rumpun-rumpun bambu di tepi-tepi kali seperti anak kecil mencabuti rumput. Digugurinya tebing-tebing dan diseretnya beberapa bidang ladang penduduk. Lusi! Dia merombak tebing-tebingnya. (*Yang Sudah Hilang, p.1*)

静かに流れていた水は狂ったようになった。あたかも小さな子供が草をむしり取るように、水は河岸の竹の茂みをひきちぎって行った。(受動パターン3) 河岸をけずりとり、(受動パターン3) 住民の土地をいくつかもぎとって行った。(受動パターン3) ルシ河！それはみずからの河岸をずたずたにしてしまう河なのであった。(能動)

このテキストは自動詞文ではじまり、受動のパターンが続いて、最後が能動で終わっている。同じようなパターンの展開がモフタル・ルビスの「果てしなき道」にあることを、McCune(1979)は指摘している。

Digoncangkannya kepalanya untuk menghilangkan pikiran-pikiran yang menyayukan dan meragukan hatinya. Dipaksanya untuk menggesek biola kembali. Dia memainkan polonaise Heroic Chopin. (*Jalan Tak Ada Ujung*)

彼は、決意をにぶらせ、迷わせる考えを追い払おうとして頭を振った。(受動パターン2)
再びバイオリンを弾こうと自らを強いた。(受動パターン2) 彼はショパンの英雄ポロネーズを弾いたのだった。(能動)

受動が連続したあとでなぜ能動でしめくくるのか、という問題について、本稿で提示したパターンを当てはめて考えて見ると、次のようなことが言える。受動を使うかぎり、テーマになれるのは(行為者をふくむ)行為か対象である。行為者をテーマとするには能動を使うしかない。最後の文が能動に転換しているということは、行為者はテーマになる必然性がそこに存在しているからに他ならない。上のテキストの場合は明かである。最後の文はルシ河が何をしたかではなく、ルシ河とはどのような川であるのか、がメッセージなのである。一連のルシ河の行為のあとに、結論的に、ルシ河の性格として「みずからの河岸をけずってしまう」ことが言われている。

下のテキストの場合も同様に考えていだろう。イサ(主人公)が何をしたのかが問題ではなく、彼とはいかなる男なのか、というのがメッセージである。つまり彼とは英雄ポロネーズを弾くような男なのである。ここではそうしたメッセージの構造によって、読者は彼という男について、それがいかなる男なのかということを考えるよう仕向けられているのである。

(5)おわりに

本稿は、インドネシア語のいわゆる受動、そして能格と呼ばれている構文について、要素の順とテーマ・レーマの配置によって4つのパターンが存在し、それぞれが話者のコミュニケーション上の戦略という観点から、特有の機能をになって使用されていることを明らかにした。インドネシア語の受動は、対象が前置される場合には受動に見え、対象が後置される場合には能格と見えるが、そうした対立以上にメッセージの相互補完的な内的構成要素としてのテーマ・レーマへの分割の方を優先させた。というのも、主語と述語の倒置はインドネシア語においては常套手段であって、そのような事態を構文の基準に採用するのはあまりいいやり方のように思われないからである。

インドネシア語における受動の問題は、まったく異なる動詞の体系をもった2つの言語のタイプの接触によって生まれた。ひとつのタイプにおいては、受動は受動的な感覚に大まかに対応するところのフォーマルに規定できる形式に与えられた名であった。しかしもう一方のタイプにおいては、受動的な感覚は言語の構造的な組織に組み込まれてはいなかった。その言語におけるいわゆる受動には受動的な感覚も「含まれて」はいたが、その形式はもともとそれを表現するため

に存在していたのではなかった。それは、受動がそれと共存するその他の意味的素性と別れて、独立したひとつの形式にまで発展する可能性をもった領野であった。インド・ヨーロッパ諸語の受動が中動から発達したことはよく知られた事実である。そして現在、われわれはインドネシア語において受動の分岐する過程をかいま見ているのである。そのことについてはまた改めて論じなければならないが、その分岐する前の領野をそれ自身として記述するという点において、本稿の目的はひとまずは達せられたと思う。

注

- (1) 今までの受動の問題についての整理は Mccune(1979) を参照。
- (2) ここで能動と言っているものは、厳密には接頭辞 ME- のつく他動詞である。接頭辞 ME- は、基語 (base) の語頭音によって鼻音化、または前鼻音化をおこす。流音、半母音の前では鼻音化はおきない。原則的には、語頭音と homo-organic な鼻音があらわれる。-baca の場合、membaca というように mem- があらわれる。
- (3) 目的語前置の受動が Topicalization ではなく、やはり受動の一種だということの議論は Chung (1976) を参照。
- (4) Verhaar(1988) は、能格構文が口語できわめて多いことを指摘している。時事文や公式的な文書では対格構文が多い。筆者のインフォーマントによれば、行為者が 3 人称の受動 (di-nya) はとてもフォーマルな感じがするとのことである。実際口語においては、dibacanya よりも dia baca の方がよく使われているようである。
- (5) 能格としての議論は、Cartier(1979)、Hopper(1983)、Verhaar(1983,1988) を参照。
- (6) Brown & Yule(1983) は、テーマを文の最も左にある構成素と定義している。そしてレーマを文のテーマに続く残りのものすべて、としている。
- (7) テーマ・レーマ論をインドネシアの言語にあてはめてみた例は、Poedjosoedarmo(1977) である。彼女はジャワ語の例を出して、次のように分析する。

Bapakku guru. Bapak 父 -ku 私の
Theme Rheme

Guru bapaku. guru 先生
Rheme Theme

“My father is a teacher,”

Sing maringi Bapak. sing ~する人 maringi 与える
Theme Rheme

Bapak sing maringi.
Theme Rheme

“It is Father who gave(it).”

彼女はテーマをトピック、レーマをコメントのかわりに使用することを提案しているのだが、それにしても、最後の文のテーマとレーマはむしろ逆ではないかと思われる。文頭をテーマとするのなら、上 2 つの例文の分析が一貫していない。

- (8) Verhaar(1988, p.356) は自動詞文においては行為者が、受動文においては対象が自由な動きを示すことを指摘している。むしろ能動文において行為者が自由であると言うべきであろう。

引用文献

- Brown, Gillian, & George Yule: *Discourse Analysis*. Cambridge University Press, 1983.
- Cartier, Alice: 'De-voiced Transitive Verb Sentence in Formal Indonesian,' in Plank(ed.) *Ergativity: Towards a Theory of Grammatical Relations*. Academic Press, 1979.
- Chafe, Wallace: 'Givenness, Contrastiveness, Definiteness, Subjects, Topics, and Point of View' in Li(ed.) *Subject and Topic*. Academic Press, 1976.
- Chung, Sandra: 'On the Subject of Two Passives in Indonesian', in Li(ed.) *Subject and Topic*. Academic Press, 1976.
- Firbas, Jan: 'On Defining the Theme in Functional Sentence Analysis,' in *Travaux Linguistiques de Prague 1*, 1964
- Firbas, Jan: 'Non-Thematic Subjects in Contemporary English,' in *Travaux Linguistiques de Prague 2*, 1966.
- Halliday, M.A.K.: *An Introduction to Functional Grammar*. Edward Arnold, 1972.
- Hopper, Paul L: 'Ergative, Passive, and Active in Malay Narrative,' in Klein-Andreu(ed.) *Discourse: Perspectives on Syntax*. Academic Press, 1983.
- Mccune, Keith: 'Passive Function and the Indonesian Passive,' *Oceanic Linguistics*, vol.18, No.2, 1979.
- Poedjosoedarmo, Gloria: 'Thematization and Information Structure in Javanese.' in Amran Halim(ed.) *NUSA vol.3 Miscellaneous Studies in Indonesian and Languages in Indonesia Part III*, 1977.
- Verhaar, John W.M.: 'Ergativity, Accusativity, and Hierarchy,' *Sophia Linguistica* 11, 1983.
- Verhaar, John W.M.: 'Syntactic Ergativity in Contemporary Indonesian,' in McGinn(ed.) *Studies in Austronesian Linguistics*. Ohio University Press, 1988.

引用作品

- Idrus, 'Kota-Harmoni,' 'Jawa Baru,' 'Pasar Malam Jaman Jepang,' 'Sanyo,' 'Fijinkai' 'Oh ... Oh ... Oh ... !' 'Heiho,' dalam *Dari Ave Maria ke Jalan Lain ke Roma*. Balai Pustaka, 1986.
- Jones, Russel, *Hikayat Sultan Ibrahim*. Foris Publications/KITLV, 1983.
- Pramoedya Ananta Toer, 'Yang Sudah Hilang,' dalam *Cerita dari Blora*. Wira Karya, 1989.
- Pramoedya Ananta Toer, *Anak Semua Bangsa*. Wira Karya, 1989.

(1990. 5. 7 受理)